

「われは湖の子～」ではじまる「琵琶湖周航の歌」。滋賀県内のいたるところで流れており、滋賀県民にとっては、とても馴染み深い歌です。その歴史は古く、歌の誕生は1917（大正6）年に遡ります。

1. 歌の成り立ち

作詞者は長野県出身の小口太郎です。当時、彼は第三高等学校（現在の京都大学の前身の一つ）の水上部（ボート部）に所属する学生でした。水上部では、数日かけて琵琶湖をボート（当時はフィックス艇）で周航する行事（琵琶湖周航）が例年行われていたのですが、小口太郎は1917（大正6）年に行われた琵琶湖周航の際に訪れた今津の宿で、自作の詞を披露します。これが同行していたクルー仲間によって「ひつじぐさ」の曲にのせて歌われたのが「琵琶湖周航の歌」です。

この「ひつじぐさ」は、新潟県出身の吉田千秋が作った歌です。イギリスの詩「WATER—LILIES」を、吉田千秋が訳詞・作曲したものと考えられており、彼によって1915（大正4）年に音楽雑誌『音楽界』に発表されて、当時の三高生の中で流行していたようです。



写真2-3-1 フィックス艇

2. 小口太郎と吉田千秋の生涯

小口太郎は1897（明治30）年に長野県諏訪郡（現在の岡谷市）で生まれました。彼は1916（大正5）年に、第三高等学校へ入学します。「琵琶湖周航の歌」の詞を披露したのは、その翌年です。三高卒業後は東京帝国大学に入学して、その後は同大学航空研究所に就職しますが、1924（大正13）年に急死します。26歳の若さでした。

吉田千秋は1895（明治28）年に新潟県中蒲原郡（現在の新潟市）で生まれました。彼は1912（明治45）年に、東京農業大学に進学しますが、幼少期から患っていた結核が悪化したため、後に退学します。闘病生活をする傍ら、豊富な教養や優れた感性を活かして、様々な分野の論文や詩・音楽を作り雑誌に発表しました。その中の一つが「ひつじぐさ」です。しかし、「ひつじぐさ」発表4年後の1919（大正8）年に、故郷の新潟県にて24歳の若さで亡くなりました。

小口太郎と吉田千秋の間に面識はありません。しかし、「琵琶湖周航の歌」は寮歌として歌い継がれ、1971（昭和46）年には加藤登紀子が歌って大ヒットし、現在に至ります。



3. 「吉田千秋」の発見にまつわる奇跡の話

「ひつじぐさ」の作者(「琵琶湖周航の歌」の原曲者)の名前と経歴は長らく不明でした。しかし、1982(昭和57)年に東京の国立国会図書館で先述の『音楽界』が発見され、名前が判明します。また、「吉田千秋は昔東京に住んでいて、後に新潟県に転居した」という事も、後に判明します。

そこで、「琵琶湖周航の歌」の発祥地として、歌を活用した地域振興に取り組んでいた今津町(現在の高島市)が、1993(平成5)年に新潟県の地元紙へ依頼して、「吉田千秋」の消息を求める記事が掲載されました。これが旗野博の目にとまったのです。

旗野は、新潟県出身の歴史地理学者の吉田東伍の研究家でした。彼は、吉田家の家系図に、吉田東伍の息子の一人で早世した「千秋」という人物の名前があったことを思い出して、吉田冬蔵(東伍の息子で千秋の弟)に問い合わせます。千秋没後74年後に奇跡が起きたのです。

「琵琶湖周航の歌」は、大正・昭和・平成・令和と100年以上にわたり歌い継がれている稀有な歌です。また、「吉田千秋」の発見過程はドラマチックな逸話といえます。たとえ時代が移り変わっても、この魅力あふれる歌が、歌い継がれていくことを心から願います。



写真2-3-2 ヒツジグサの花

琵琶湖周航の歌

作詞 小口太郎 原曲 吉田千秋

- | | |
|--|--|
| 1 われは湖の子 さすらひの
旅にしあれば しみじみと
昇る狭霧や さぎなみの
志賀の都よ いざさらば | 4 瑠璃の花園 珊瑚の宮
古い傳えの 竹生島
佛の御手に いだかれて
ねむれ乙女子 やすらけく |
| 2 松は緑に 砂白き
雄松が里の 乙女子は
赤い椿の 森蔭に
はかない恋に 泣くとかや | 5 矢の根は深く 埋もれて
夏草しげき 堀のあと
古城にひとり 佇めば
比良も伊吹も 夢のごと |
| 3 浪のまにまに 漂えば
赤い泊火 なつかしみ
行方定めぬ 浪枕
今日は今津か 長浜か | 6 西国十番 長命寺
汚れの現世 遠く去りて
黄金の波に いざ漕がん
語れ我が友 熱き心 |

琵琶湖周航の歌資料館 川崎 紘治